

一五四 本寺觸頭法義訴訟裁決心得

諸宗之寺院本末論、或錄役座階法系住番世牌等、其外法儀ニ掛り候公事訴訟ハ、其錄所觸頭本寺等ニ而逐一遂吟味、依怙最負無之可令裁斷事ニ候、申付を致違背不相請候ハ、咎可申付候、其上にも及難澁候者ハ、奉行所へ可差出候、吟味之上急度可申付候、尤他宗又ハ俗人へ懸候出入ハ、唯今迄之通添簡を以可差出候、右之通諸宗一統可相心得候、

(寛保元年)十一月

一五五 勸化御免ニ付觸書

諸國寺社御修復爲助力勸化御免之上、寺社奉行連印之勸化狀持參、御料、私領、寺社領、在町致巡行候寺社之輩、只今迄村方ニより、勸化停止之旨地頭より申渡有之候間、勸化難成由斷申所々も候段相聞候、私之勸化相留候儀ハ領主心次第ニ候、從公儀御免之上諸國巡行之事ニ候條、寺社奉行連印之勸化狀持參候寺社之輩へハ、志次第可致勸化旨、御料ハ御代官、私領ハ地頭より兼而可申聞置候、

(寛保二年)五月

一五六 神子修驗通行解禁ニ付達

上野國新田郡佐位郡山田郡勢田郡、下野國安蘇郡、武藏國多摩郡新倉郡、相摸國高座郡鎌倉郡愛甲郡大住郡陶綾郡足柄上郡、下總國葛飾郡村々所々、神子、修驗無滯往來候處、近キ頃右郡々村々境ニ禁制之札相建、穢多非人共番ニ付置、神子、修驗村内出入不爲致候、修行斗ニも無之、一派仲間親類縁者有之候者、通路不相成、由相聞候、神子、修驗共ニ觸頭より銘々修行札渡置、紛敷儀無之候條、前々之通往來可爲致候、若又修行ニ事寄惡事致候ハ、可訴出候事、右之趣、御領私領共ニ向寄御代官より通達可有之候、

(寛保三年)四月

一五七 諸寺院持添地家作禁止之觸書

一諸寺院境内寄附地等申付持添地ニハ、家作致間敷旨、證文申付差免候、然處近年持

添地へ土藏坏建度粗申出候、先達而申付候通、家作之儀は、一向相成(儀脱カ)さる候間、其趣相心得、自今相對之願仕間敷旨、觸下之寺院へ可申渡置候、

延享二乙丑年二月十八日

右之通、山名因幡守殿より被仰渡候、

一五八 寺院本末爭取捌ニ付内達

一寺院本末爭論之事、寛永十年諸宗より差上候寺院本末帳を以、取捌可申儀勿論ニ候、若又本末不相改而不叶事有之は、伺之上裁許可申付候、但、寛永以來裁許申付候内、本末帳面相違出來之分、此節猥ニ相改候儀ニ而は無之候、向後右之通堅可相心得事、

右寛永十年差上候帳全備無之様相見候之間、右帳面に載候寺格之寺院不足之分、此節帳面ニ取置可申事、

右之通被仰出候間、可被得其意候、

(延享二年)丑七月

別紙御書付之趣、得と相心得可申候、末寺帳不足之分有之候間、相改可被差出候、

一五九 寺社方町屋移管之觸書

御月番松平主計頭殿被仰渡候、

一寺社方へ附候町屋之分、不殘向後町奉行支配ニ相成候間、可被得其意候、觸下へも可相達候、

(延享二年)閏十二月

右之通、從大岡越前守被仰渡候、

一六〇 寺社境内拾箇年季借家移管ニ付觸書

一寺社境内ニ有之候拾箇年季借家之分は、只今迄之通にて町奉行支配無之旨、舊冬諸觸頭へ申渡候得共、右拾箇年季借家ニ而も町人罷在候故、町人之分不殘向後町奉行支配ニ成候間、被得其意、觸下之寺院へ可申渡候、

(延享三年)正月十八日

一六一 寺社境内借家書出ニ付觸書

一 寺社境内借家之儀、近年差免候分は勿論、前々より建置候分共ニ其寺々より越前守方へ書出候様、觸下之寺院へ可申渡候、

(延享三年)正月十八日

一六二 寺社修復願取扱ニ付内達

寺社御修復願之儀、享保年中より度々申渡、寛保元西年御修復願出候寺社多有之候節、御代々思召を以御造營御修復等被仰付候寺社、永々御修復所と相心得、大破ニ及候上御修復之願、又ハ勸化等之儀願出候、左様ニハ有之間敷事ニ候、向後上より御修復被仰付間敷候、勿論寺社領相應ニ有之場所ハ、自今以後小破之節、早速修復を加、及大破候節願出、或ハ専ら勸化之事願出儀ハ有之間敷儀ニ候旨、

右之通、御修復願出候寺社へ可被申渡旨相達候處、其節御修復願候寺社其外右ニ可准寺社へも不洩様申渡無之哉、近年御修復願出候寺社多有之、此以後段々願出候ハ

、際限無之事候條、以來彌前書之趣相心得、公儀へもたれ不申、寺社領或は世間之助力を以修復いたし候様、兼而寺社之者共へ猶又不洩様とくと可被申渡置候、且又寛保之度相達候趣被申渡候上ニ而、自力修復難調儀も有之願出候ハ、寺社之格合を以勸化御免被仰付候儀も可有之、其助成を以、修復取懸候節御由緒之輕重ニ應し、御金材木之内可被下哉、是又寺社之者共へ申渡候儀ニハ無之、寺社奉行心得之ため申聞置候段、其節相達置候通候得ハ、縦御修復或ハ勸化等之儀願出候共、容易ニ取上候筋ニハ無之候處、近頃ハ願出次第一通り被相糺候迄ニ而、とくと寛保之度申渡置候書面之趣を以被相糺、被申聞候儀も不相見候、此度相達候趣、猶又寺社之者共へ被申渡候上ニ而も御修復、或ハ勸化等願出候寺社も有之候ハ、彌前書之趣を以得と被相糺、無據筋ハ被申聞候様可被相心得候、

右之通、此度寺社奉行へ申渡候、享保年中より度々申渡、勸化又ハ御金材木等被下可相濟場所も、其以後御修復願出候節、右之吟味無之願之書面を以吟味有之、又々御修復被仰付候類も有之、區々ニ相成候條、以來御修復願等吟味ニ下ケ候節、前書之趣を以とくと遂吟味以來間違無之様、可被相心得候、

五月

一八四

○コノ法令享保年中及ビ寛保元年ノ法令ヲ云爲シ、而シテ次ニ掲グル寛延三年ノ法令ニ言及セザルハ、偶延享元年以後寛延三年四月發令以前ノモノタルヲ證スルヲ以テ此ニ收ム、

一六三 勸化願制限ニ付内達

寺社奉行へ

近年寺社建立又爲修復、御免勸化之儀數多願出候、公儀御建立地且至而譯も有之候ハ、格別左も無之分向後取上に不及願出候ハ、難成段申聞可被相返候、

(寛延三年四月)

一六四 一向宗改派ニ付内達

寺社奉行へ

一向宗改派之儀唯今迄之通、公儀ニ而御取上無之筋ニ候、然共寺共改派致候付而

は彼是差障候儀も在之候間、其僧一己改派致候儀ハ其通ニ差置、寺共改派致候儀は何れ共領主之了簡次第申付候筈ニ候間、爲心得相達候、御料所之儀も右之趣ニ准し、寺社奉行了簡次第申付候様可被致候、

(寛延三年)四月

一六五 虚無僧使用深編笠ニ付觸書

總州小金一月寺、武州青梅鈴法寺門弟共相用候深編笠、在々ニ而商賣仕候者共、以來兩寺又ハ國々其最寄ニ而右末流之寺院ニ而印鑑受取置、合印持參不致候ハ、虚無僧并商人たり共、堅賣不申候様可致旨、御料者御代官、私領者領主、地頭より可申渡候、
(寶曆八年)十月

一六六 虚無僧取扱ニ付内達

寺社奉行へ

今度虚無僧之姿を似せ候者有之候ニ付、本則差出候節之始末一月寺、鈴法寺へ相尋

一八五

候處、兩寺之取扱區々ニ相聞候、其去年右兩寺相願候は、門弟共相用候編笠を、近年浪人體之者其外俗人、右笠をかふり紛敷體之者、又は門弟之姿を似せ候者所々致修行候様相聞候、尤似せ者は見合次第召捕候得共、若御尋者等之妨ニも可相成哉、旁右笠俗人へは賣不申、向後兩寺印鑑を以賣買致し候様仕度旨相願候付願之通申付候處、右願之趣意ニも符合不致事候、然ル處一月寺儀、本則等不埒之取計有之、宗門一派へ對し申譯無之、退院致し候由書置致し、當四月出奔候由、然上は一月寺只今迄之取計方不埒有之儀と相聞候、以來は兩寺區々無之、古來より之寺法可有之儀ニ候間、寺法之通猥無之様申付方可有之候條、得と相糺申付方之儀評議致し相伺候様可被致候、

(寶曆九年閏七月)

一六七 虛無僧本則付與之定

小金 一月 寺

青梅 鈴法寺

右兩寺より、本則相望候者へ與へ候儀、是迄一月寺ニおゐて任懸望、士商之無差別致附與來、鈴法寺ニ而ハ武家之儀者任望、町家之者へ者望候共決而不致附與候得共、尺八手練之者相望候ニ付、竹名を相許來候由、一月寺ニ而者竹名と申儀無之由、彼是兩寺取扱區々ニ相聞候、一宗一派之兩寺たる上者、左様ニ者有之間敷事ニ候、自今已後ハ兩寺より本則懸望之ものへ附屬之儀、仕官之もの於相望者、其人品篤と相糺、出奔人等ニ無之候ハ、體成證文取之、可任其望、其外百姓町人等者、假令只管相望候共、畢竟遊戲之儀ニ而不宜之事ニ候得ハ、急度令停止候條、可得其意候、且鈴法寺方ニ而も町家尺八手練之ものへ相許候竹名之儀者、是其用無之事ニ候、向後堅可爲無用候、附本則所持之虛無僧之姿ニ而修行致候儀、形を相忍ひ不申候而不叶子細有之、番所へ罷越相願候ハ、其趣意篤と承届、實々紛れ無之候ハ、其日限ニ任望可遣、其日不得本望候ハ、又翌日法衣等可貸遣、連日任其意置候儀、可爲無用候、尤致修行方角等承糺、假ニも遊興之筋ニ候ハ、兼而附與いたし置候書則も可取戻、且又衣服之儀、寺法之通綿服或ハ絹袖ニ限、修行者相應之儀勿論之事ニ候、右之趣、今般相改申渡條、諸國書則差出候程之末派寺院へも、無紛相觸之可申候、尤延

寶年中書付を以申渡候趣、彌以嚴重ニ可相守、若於違背者可爲曲事もの也、
寶曆九年

一六八 將軍代替寺社領朱印交付ニ付達
松平攝津守殿御渡

覺

一御朱印頂戴之寺社之輩、不依寺社領之多少ニ境内計リ之雖爲御朱印、於令所持者御朱印可被下之間、御領私領に有之寺社領御朱印に寫を差添、來酉正月より三月迄之内、江戸へ致持參、阿部伊豫守、戸田采女正所へ相達候様ニ可被觸之候、以上、

(寶曆十年)八月

一六九 寺地寄附并ニ移轉ニ付内達

酒井石見守殿御渡

三奉行へ

只今迄元來寺地ニ而無之百姓所持之地所を、寺院へ寄附いたし、又ハ讓地致候も有

之、右之地所を他之寺院或ハ他寺之塔頭等へ讓渡、右場所へ引寺等致し、又は本寺離末いたし、願主勝手之宗旨ニ仕替、引寺いたし、或ハ當時退轉致し、寺號計水帳等有之候を取立、引寺號にいたし候儀、并墓所詰り、添地寄進境内へ圍込候儀、右之類自今可爲無用候、百姓ハ勿論、たとひ領主地頭たり共、田畑猥ニ寺院へ寄附候儀、容易ニハ難成事ニ候、

右之通可被相觸候、

(寶曆十二年)二月(廿一日)

一七〇 出家山伏等借宅佛壇構禁止之觸書

一出家山臥行人願人町屋ニ致借宅候共、佛壇構候儀不致筈ニ候、諸旦那より祈念頼候は、其時計繪像を掛ケ祈念仕、祈念相濟候は、繪像等飭置候儀無用ニ可仕旨、先年御觸有之候之處、近頃心得違之者有之候哉、於町家在家も、佛像之類飭置祈念いたし、或は夜中談議に似寄候儀有之、祈念相濟候而も、飭置候品其儘差置候も有之、由粗其聞有之候、右體之儀は其本寺、觸頭より常々可相改事ニ候間、有之間敷事

ニ候得共、以來右體之儀於有之は、見廻り之者見當り次第、爲遂吟味候間、此旨相達置候、

(明和元年)申七月

右之通從、酒井飛騨守殿被仰渡候、

一七一 葵御紋使用禁止之觸書

一都而御紋附之品等被遣候御方有之候共、享保年中被仰出候通、相用候儀は不相成候間、什物ニ可致置候事、

(明和二年)酉十二月

右之通、鳥居伊賀守殿御内寄合ニ、三箇寺出席仕候處、御懸リ本多長門守殿御口上ニ而被仰渡候、

一七二 出家社家修驗等借地借宅神佛莊嚴禁止之觸書

一他國より御當地へ借地借宅いたし、勸化所其外法用にて罷出居候寺院、社家、修驗

共奉仕候は、神佛旅宿ニ而も朝夕之勤行は可致事ニ候得共、心得違佛檀神具等莊嚴目立候様取傍、或は手水鉢、提灯等表へ差出置候も有之付、前々より右體之儀無之様申付候事ニ候得共、今以不相止古跡地同様ニ相見へ如何之事ニ候、此已後佛檀神具其外共自分勤行迄之事ニ候間、彌表へ不目立様可致候、尤其向之者差出候、地主家主并其所之町役人よりも相改申筈ニ候、若不相用輩は、奉行所へ是又可申出筈ニ候間、其旨相心得、心得違紛敷儀無之様可致段、急度配下觸下之面々へ可申付候、

(明和四年)亥閏九月

右之通從、松平伊賀守殿被仰渡候、

一七三 寺院堂上方猶子ニ付觸書

寺社奉行へ

堂上方之猶子と稱候諸寺院之僧侶、其寺格相當之儀は勿論之事に候得共、不相當之寺院にも格式宜可相成手段に而、猶子に相成候類も有之趣ニ相聞候、右類は御條目

掟等へも相障、如何成事に候、向後猥に無之様、急度可相守候、尤寺格相當之猶子（ヨウシ）と寺院は、御條目掟等不相背様、急度可相心得候、

右之趣、諸國末々迄不相洩様可被相觸候、

○右大成令ヲ本トシ、天明集成ニヨリ補ヒタレド、猶誤脱アルベク、末尾文意明カナラズ、

一七四 諸寺社神事佛事葵御紋使用禁止之觸書

一 諸寺社神事佛寺開帳等、其外平生共葵御紋附候品々、向後御女中様方よりも容易ニ御寄附無之、御三家其外大名よりも菩提所等は格別、其外へは寄附無之筈ニ候、是迄御寄附并寄附之分は、什物ニ致し置、平生は勿論、神事佛事開帳等之節も、相用候儀可爲無用候、尤葵御紋相用候面々、靈牌等有之寺院へ相納候膳具等、其外打敷等御紋附候品、其人之法用ニ相用候儀は不苦候、

（明和五年）六月

右之通、子六月、於久世出雲守殿御内寄合、諸宗之觸頭へ被仰渡、

一七五 東西本願寺京都末寺宗旨改ニ付内達

寺社奉行へ

先達而致評議被申聞候、東西本願寺京都末寺、前々より町内宗旨改帳面へ結込、町内より差出來候得共、自今は町役等諸事は迄仕來之通致し、宗旨改之儀は、本山へ取集役者奥印形を以、町奉行所へ直に差出度旨、可爲願之通旨申渡候様、所司代へ相達候、
（明和八年二月）

一七六 門跡以下諸寺社節約ニ付内達

寺社奉行へ

一 門跡方并江戸遠國共、寺社諸拜借之儀は勿論、堂社御寄附等之儀、此度御儉約に付、當卯年より五箇年之間は、御沙汰に不被及筈に候間、右願筋申立候はゞ、其旨可被申達候事、

一 神器、佛具等之儀は、形有之候分は、損強候とも繕相用、裝束類之儀は、當卯より已迄

三箇年之間は、新調不被仰付筈に候事、
右之趣可被得其意候、

(明和八年四月)

一七七 東叡山及比増上寺山内盜賊改ニ付内達

寺社奉行へ

上野増上寺山内をも盜賊改組之者相廻、怪敷もの見當候はゞ、山外へ召連致吟味候
筈に候、此段上野執當増上寺へも可被達置候、

(安永元年三月)

一七八 不法之虚無僧取計方觸書

加納遠江守殿御渡、建部六右衛門被相達候、

近年村々へ虚無僧修行之體ニ而參り、百姓共へねたりケ間敷儀申掛、或ハ旅宿申付
様、村役人などへ申候故、宿取遣候得ハ、庵宅ニ而止宿難成由を申あられ、其場ニ居合

候者共を尺八ニ而打擲いたし、疵付候儀有之段相聞、不届之到ニ候、虚無僧修行致候
者志次第之施物を請、夜ニ入候ハ、相對ニ而一宿可致筋ニ候間、以來虚無僧共聊も
不法之筋有之候ハ、其村々ニ而指押へ、御料ハ御代官并御預り役所、私領ハ領主地
頭役所へ早々召連出へし、若於相背ハ其村方可爲越度者也、
右之趣、御料私領寺社領等、不洩様相觸、村々ニ而爲寫取、村々入口高札或ハ役人之宅
前坏へ爲張置可申候、

(安永三年正月廿三日)

一七九 勸化取扱ニ付内達

寺社奉行へ

都而寺社修復等之ため勸化相願候節、勸物取集方之儀、向々より勸化所へ相納、或は
在町役人共より勸物取集、最寄勸化所へ相渡候様致度旨申立、願之通被仰出も有之
候得共、追々右之通り役人共より勸物取集、勸化所へ遣候様成行候而は際限も無之、
在町共迷惑可致候ニ付、別して御由緒有之寺社、又は譯立候願之筋は格別、其外之儀

は以來難相成間、其旨被相心得、右之趣寄々可被申達置候、

(安永三年)三月

一八〇 寺社修復願取扱ニ付内達

寺社奉行へ

惣而寺社御修復等之願申立、各より被申聞候上、右願通相濟候様致度段、手寄を以、御所方へ相願、禁裏御崇敬も有之候付、願之通被仰付候様被成度旨御沙汰之趣、所司代より申來候類も有之候、一旦公儀へ相願候を、猶又御所方へ願候儀は有之間、鋪事に候、以來右體之儀有之候は、却而願之障にも相成、筋に寄急度被及御沙汰候儀も可有之旨、寺社之輩へ可被申渡候、

(安永三年)十二月

一八一 門跡以下諸寺院貸付金取扱ニ付内達

寺社奉行へ

惣而門跡方其外寺院等、御寄附金又は自分賄金を貸附に致し置、堂舎修復再建等手當に致し候由を以、祠堂金等之名目に而貸附之儀相願候得は、被相伺候上、借受候もの名前所付并金高書付等、其所之奉行所へ差出置、右借受候者へ無滞返納可致旨、奉行所より觸流之儀被申達候も有之候處、右は奉行所より返濟方之觸流迄に候得は、自分金貸附等も難相知に付、以來は寺社貸附金返濟方觸流之儀願出候共難相成候間、被得其意、實に堂舎修復等之手當に致し候譯立、難捨置筋に候は、相願候金高不殘公儀へ爲差出、其所之奉行所又は御代官より利足并年限を定、在町へ貸附、其寺院入用之節、願出候は、取立相渡候積に候間、貸附金相願候門跡方、其外寺院等有之候は、右之趣を以其筋可被相伺候、

(安永四年)六月

一八二 寺社出訴ニ付觸書

是迄寺院之出訴は、本寺觸頭之添簡を以奉行所へ罷出、社人之出訴は添簡無之罷出候得共、以來地頭有之寺院之出訴は、御代官領主、地頭と本寺觸頭兩添簡を以罷

出、社人之出訴は御代官、領主、地頭之添簡ニ而可能出旨、寺院社人へ申觸置、御代官、領主、地頭ニ而其旨可相心得候、

右之趣、萬石以上以下共不洩様、可被相觸候、

(天明二年)二月

一八三 青蓮院宮盲僧支配ニ付觸書

御勘定奉行へ

中國西國筋其外是迄無支配之盲僧共、青蓮院宮御支配ニ相成候ニ付、武家陪臣之悴盲人ハ盲僧ニ相成、右宮御支配ニ附候共、又は鍼治、導引、琴三味線等致し、檢校之支配ニ相成候共、可爲勝手次第候、百姓町人之悴盲人は盲僧ニは不相成、鍼治、導引、琴三味線等致し、檢校之支配ニ可相成候、若内分ニ而頼親等致し、盲僧ニ相成候儀は決而不相成事ニ候、右之外百姓町人之悴盲人ニ而、琴三味線、鍼治、導引、渡世不致、親之手前ニ罷在候而已之者、并武家へ被抱、主人之屋敷又は主人之在所へ引越、他所之稼不致分は安永五申年相觸候通可爲制外事、

右之通可相守旨、不洩様、可被相觸候、

(天明五年)八月五日

一八四 將軍代替寺社領朱印交付ニ付達

玄蕃頭殿御渡

御目付へ

覺

一御朱印頂戴之寺社之輩、不依寺社領之多少、境内計之雖爲御朱印於令所持者、御朱印可被下之間、御料私領に有之寺社領は、御朱印に寫を差添、當七月より九月迄之内、江戸へ持参いたし、松平和泉守、堀田相摸守所へ相達候様、可被相觸候、以上、

(天明七年)未二月

一八五 神子修驗通行解禁ニ付達

御目付へ

甲斐國山梨郡八代郡巨摩郡都留郡駿河國志太郡益津郡有渡郡安倍郡庵原郡富

士郡駿東郡村々、前々神子、修驗無滯往來候處、近キ頃右郡々村々境ニ禁制之札相建、穢多非人共番ニ附置、神子、修驗村内出入不爲致候、修行計ニも無之、一派仲ケ間親類縁者有之候もの、通路不相成、由相聞候、神子、修驗共ニ觸頭より銘々修行札相渡置、紛敷儀無之候條、前々之通往來可爲致候、若又修行ニ事寄せ惡事致候ハ、可訴出候事、

右之趣、御料、私領共向寄御代官より通達可有之候、

(天明八年)申 六月

一八六 出家社家修驗等借地借宅神佛莊嚴停止之町觸

一他國より御當地へ借地借宅致し、勸化所其外法用ニ而罷出居候寺院、社家、修驗共、寺社之神佛旅宿ニ而も朝夕之勤行可致事ニ候得共、心得違、佛壇、神具等莊嚴目立候様取飾、或者手水鉢、挑燈を表へ差出置候も有之候ニ付、不目立様可致段兼而寺社奉行より申付有之候得共、年久敷罷在候者ハ、承傳へ致參詣候者も多、古跡地同様ニ相見へ紛敷、信仰之輩多相成候ニ付而ハ、寄附之品も相増、外々ニ而者古跡之

寺社同様ニ相心得、如何之儀ニ候、依之他國より罷出居候寺院、社家、修驗共奉仕之神檀佛檀等、自分々々之朝夕之勤行之爲メニ付、神佛莊嚴表へ目立不申様可致、明和四亥年寺社奉行より觸頭へ急度申渡有之、其節町觸も差出置候事ニ候得共、其後年月も過候ニ付、近來自然と心得違之者も有之、借地借宅之寺社、修驗等も多相成、古跡地ニ紛敷可相成哉ニ付、此度寺社奉行より猶又觸頭呼出し、心得違無之様急度申付有之候得共、神主、社家共者觸頭無之、旅宿ニ罷在候者も多、難行届候間、右體之者差置候地主、家主并町役人共、先年相觸置候趣を、猶更相心得、常々改、若不相用輩有之候ハ、月番之番所へ訴出、差圖を受、寺社奉行へ可訴出候、此旨町中可觸知者也、

(天明八年)申 七月

一八七 盲僧支配ニ付指令

松平伊豆守殿御渡

寺社奉行へ

天明五巳年被仰出候通、其節迄無支配ニ而罷在候盲僧は御配下ニ被加、且其以後御

配下を相願候盲人は、武家陪臣忤之分計御配下ニ被加、縦地神經讀誦、竈竈等之類盲僧之致作業候而も、檢校支配ニ附來候分は御配下ニは、不相成事候間、相廻され候家司共、先々ニおひて彌紛敷取扱無之様可致候、若紛敷儀於有之ハ、急度御沙汰可有之旨、家司共へ猶又嚴敷申聞置候様、青蓮院宮坊官へ可被相達候、

(天明八年八月八日)

一八八 僧侶風紀取締ニ付内達

寺社奉行へ

近來諸寺院之僧侶一躰風俗不宜候哉、道德殊勝之聞へ有之輩は稀ニ而、不律不法之沙汰のみ間々相聞へ候、都て諸家(宗カ)之僧徒、夫々作法も可有之處、畢竟本寺又は役寺觸頭等しめし方等閑成故之儀ニ而可有之候、以來本寺役寺觸頭等に而、常々無油斷心を附ケ、宗旨得達之僧侶を相す、ませ、聊も不如法成ものは夫々科等も有之、配下之示教行届候様、專一ニ爲致可申候、尤本寺役寺觸頭等之内ニも、萬一不律不如法之聞へ有之者勿論之儀、或は利欲等ニ耽り、寺務之實意疎成歟、又は一躰

其器ニ不當輩等は、假令大地本山之寺院たりといふとも、聊無用捨嚴重ニ其沙汰可有之事ニ候、

右之趣、御沙汰ニ候間、得と申談、夫々行届不取締ニ無之様可被致候、

(天明八年)十一月

一八九 盲僧支配ニ付指令

松平伊豆守殿御波

寺社奉行へ

青蓮院宮御支配盲僧之儀ニ付、去(天明五)已年御觸有之、百姓町人之忤は盲僧ニ難相成段被仰出候處、種姓御糺も不行届、依而盲僧傳法も斷可申と御歎思召候旨、去八月中被仰立之趣ニ付、其節御糺方之儀相達候得共、其段は被仰出通ニ而相分御承知被成候得共、全御糺方計之儀ニも無之、一躰出家道に入候儀、古來より種姓之差別は無之事候處、盲僧共宮御支配ニ相成り、種姓之別相立候而は、瑕瑾ニも相成、其上百姓町人至而貧窮孤獨之盲人は甚難澁之筋有之由、生涯盲僧ニも座頭ニも不相成終候は、若發心もいたし候ハ、志次第盲僧ニ成候様被成度、左候得は座頭共爲ニは聊差障可申筋

無之、旁廣御許容有之様被成度との旨、一通りハ御尤之御事候、出家道ニ入候儀、元より種姓之別無之は勿論之事ニ候得共、榮聞を羨候は人情之常、宮御支配之事と申、其上渡世も安事候得共、面々志次第と被仰出候時は、誰壹人檢校配下を望候者可有之哉、然は檢校座中は追年可及衰廢は眼前之事、賤職之者とは乍申數年立來候座中之儀、盲僧之爲ニ斷絶ニ及候も、是又御慙恤ニ可預事有之候、且又貧窮之盲人難儀之趣、盲僧とも申立候表ニ而は、全其身之渡世活計之爲、佛道ニ入事相聞候、右躰之者御支配ニ加り候、御本望之儀ニも有之間敷、却而佛意ニも背道を汚候端共可相成事ニ候、出家道種姓之差別相立、御瑕瑾之由候得共、是又再三御趣意之處、被仰立候上、御差圖ニ被爲隨候儀、聊以御瑕瑾と申筋ニは相成間敷、其上武家陪臣之忤も、間々御支配願出候輩も有之由ニ候得は、旁以御願之趣被及御沙汰ニ候間、先達而被仰出候通、御取斗有之候様、青蓮院宮家司へ可被達候、

(寛政元年二月)

一九〇 盲僧養子相續願ニ付達

寺社奉行へ

青蓮院宮より盲僧之儀ニ付、先達而被仰立候品有之、其節相達候趣有之候處、又候此度更養子相續之儀御願ニ候、然處右ハ全く百姓町人之忤、盲僧ニ難相成旨、去ル已年(天明五)之被仰出ニ差障候事、殊更先達而之御願中ニ、武家之忤御配下願候者も間々有之由ニも候得共、何方ニ而も御門下之盲僧絶不申候ハ、修法も傳可申儀、此上之御願は何れ御見合有之可然候、并職掌之儀、御門中而已之事には候得共、先頃は御願も無之程之事、強而御差支ニも不相成筋と相見候得は、先是迄之通御取扱有之候様ニこの御沙汰ニ候間、此趣家司へ可被達候、

(寛政元年閏六月)

一九一 寺社修復勸化富開帳等ニ付達

諸寺社御修復等之儀ニ付、度々被仰出も有之、御代々 思召を以、御造營御修復等被仰付候寺社、永々御修復所と相心得、只今迄ハ及大破候上、御修復又は勸化等之儀願出候、左様ニは有之間敷事ニ候、向後ハ 上より御修復被仰付間敷候、勿論寺社領相

應ニ有之場所、自今以後小破之節早速修復を加可申、及大破候上、願出或は專勸化之事願候は有之間敷儀ニ候旨、寛保寶曆之被仰出も有之候處、年久敷儀ニ而不相辨向も有之哉、近來御修復又は勸化富興行等之類敷多有之、就中富之儀は箇所多く相成、世上之風儀ニも拘り候間、追々被減候筈ニ候、實々無據子細有之願出候ハ、品ニ寄勸化開帳等は、御免も可有之候得共、可成丈小破之節修復を加、公儀へもたれさる様ニ可致事專一ニ候條、可存其旨候、

(寛政二年)十二月

一九二 寺社境内貸屋禁止ニ付達

寺社奉行へ

火除地へ之家作は勿論新規町屋等不相成段相觸置候處、寺社境内貸屋之儀、以年季相願候得者奉行所ニ而被承届候儀無際限事ニ候間、以來右貸屋之儀被承届間敷候、尤當時年期中之箇所年限年ニ而も勝手次第爲相止、并此後年季明候節願出候共、一通之儀にては難成事に候、格別之譯立候儀ニ候は、猶其品ニより候而伺

之上可被申付候、

右之段を以、貸屋有之寺社へ兼而可被相觸置候、

(寛政二年)戊十二月

一九三 僧侶市中借宅ニ付觸書

國々諸宗之僧侶、堂塔或ハ佛像佛經等建立之爲と號し、江戸表市中ニ店を借り、年限もなく住居いたし候類有之趣相聞候、自今遠國ハ勿論、都て建立等之爲、江戸表ニ店借等いたし度僧侶ハ、録所又ハ本寺之添狀を以觸頭へ申出、於觸頭得と糺之上、奉行所へ相届、聞濟之上ハ格別、猥ニ市中住居ハ致間敷、勿論當時地面或ハ致店借居候分、夫々觸頭迄可申出候、

右之通、諸寺院へ可被相觸候、

(寛政三年)五月(十七日)

一九四 無檀無本寺無住之分廢寺申付ニ付觸書

遠國寺院之内、無檀無本寺等ニ而、住職之僧、宗旨之定りも無之、何宗ニ而も望之僧へ住職いたさせ、其僧死失等ニ而、無住ニ相成候節、後住望之僧も無之時ハ、永々村持ニいたし置、其上相應之僧、村方より見立、住職いたさせ、又ハ住職を望候僧、村方へ申談、住職いたし候類、或ハ本寺之本末帳ニ書載無之候得共、於其所ハ寺院一箇寺之様ニ相成、宗旨等も定り、相續いたし、其住持之働ニ而段々寄進等いたし、其上ニハ其宗旨之本寺、觸頭へ相便、載帳と號、本末帳へ書載候類も有之哉ニ相聞候、以來右躰之類無住ニ相成候節、其所々差障無之分ハ廢寺ニ可申付候、尤右之趣、兼而其寺院へ相違置候筋ニハ無之、其時々糺之上、寺社奉行へ承合可被取計候、

(寛政六年)九月

一九五 慶光院以下十六箇寺大奥直願禁止ニ付内達

寺社奉行へ

伊勢

上人

善光寺

上人

西大寺

金剛院

護持院

氷川

大乘院

江島

岩本院

竹生島

吉祥院

高田

放生寺

金龍山

池上 浅草寺
 本門寺
 牛込 濟松寺
 覺樹王院
 靈運院
 佛性寺
 妙傳寺
 祐天寺

右之向、大奥へ直ニ願伺等差出儀も有之候、以來は何事ニよらす寺社奉行へ申出、直ニ大奥へ願候事可爲無用旨可被申渡候、

(寛政六年十月)

一九六 慶光院以下十六箇寺願伺等取扱ニ付内達

寺社奉行へ

大奥へ直ニ願伺等差出候寺院等、以來何事ニよらす寺社奉行へ申出有之様、先達而相達候趣、猶夫々相糺候處、左之通ニ相成候間、被得其意一同申談、無差支様ニ可被取扱候、尤老女衆へも此段可被達置候、

- 一 御紋附其外御寄附物御修復願
- 一 御金其外新規御寄附物願
- 一 一定式ニ無之御札守其外献上願
- 一 開帳之神佛等臨時 御内覽之儀願之類、其外にも惣而新規之願亦ハ先例有之儀ニ而も、定式之筋ニ無之臨時ニ願候品ハ、何も寺社奉行へ申出、老中へ伺可有之候、
- 一 一定式御札守献上并日限等之伺
- 一 臨時ニも御祈禱等被仰付候節、御札守等献上并日限伺

但、御祈禱被仰付之儀も、其度々御留守居迄申出、御留守居より申達之事、
 一 是迄仕來候献上物等

右之類差定候儀は、都而御留守居迄申出、大奥へ承合差圖可被致候、御吉凶事其外惣而是迄御機嫌伺致し來候分も、是又御留守居歟、番之頭承之、大奥へ可被申入候、老女衆等より挨拶可有之品も、是又御留守居承之申達候様ニ可被致事、

(寛政六年) 閏十一月

右之通、御留守居へも申渡候間、得其意可被談候、

一九七 遊行上人廻國ニ付達

遊行上人當時廻國中之所、前々より仕來ニ而領主地頭等之取扱方手重成向も有之哉ニ相聞候、右ハ領主地頭より贈物并入用向人馬等差出候仕末ニ候とも、法中爲修行廻國之儀ニ候得ハ、仕末ニ不泥役僧へ申談し可成丈省略いたし、差支無之程ニ取計不苦筋ニ候事、

(寛政七年) 二月

一九八 寺院修復屋根葺方ニ付内達

寺社奉行へ

前々より御由緒之筋を以願之上、御修復被仰付候寺院之儀、是迄柿葺之分茅葺ニ相成候得は、保方宜候間、以來場所ニより御修復之節、茅葺ニ可被仰付候間、其趣御修復可相願寺院へ、兼而可被達置候、

(寛政七年) 五月

一九九 日蓮宗不受不施派禁止ニ付觸書

上總國、下總國村々百姓共、日蓮宗不受不施之傳法を習ひ受、其身ハ勿論人ニもす、め、重き御仕置ニ相成候ものも有之、近年ニおよひ候而も不受不施之僧俗重科ニ行はる、所、右之内ニハ新門徒又ハ内信心杯と名目を附、前々御仕置ニ相成不受不施之僧を、日蓮同様ニ尊敬いたし、或は何之辨なく右ニ加り候もの迄も、夫々各請候ハ、畢竟其所之支配人、村役人等心附方不行届故之儀ニ候、農業を專一にいとなみ、分限ニ應し、先祖之法事追善等執行ひ候ハ勿論之儀、いとまあるものは佛道を信じ候は、

勝手次第之事候得共、日蓮宗之内受不受之譯等ハ、百姓共之論すへき事にあらず、公儀より被立置候宗門之外、歸依致すへき筋ニ無之とのみ相心得候得ハ、事足る儀ニ候間、是等之趣も能々相辨、紛敷宗法之持ち方等いたし申間敷、右之通申渡上ハ、重而不受不施類之宗門相持候もの有之候者、當人ハ不及申、其所のもの迄も嚴科可被行候、且右兩國之外ニ而も不受不施ハ勿論之儀、都而何宗ニよらず、異風なる執行ひ致間敷候、萬一申勸め候もの於有之ハ、其所之奉行所并御代官、又ハ領主地頭へ早々可申出候、

右之通、御料ハ御代官、私領ハ領主、地頭より不洩様可申渡候、

(寛政七年八月)

二〇〇 撞鐘再興禁止ニ付内達

對馬守殿御渡

三奉行へ

諸寺院中絶之撞鐘再興之事、以來差免候儀無用ニ候、尤廢し候以後鐘樓之礎等も其儘ニ有之、其證據分明ニ有之類ハ、糺之上被申聞候、勿論新規之造立ハ無用候事、

右之趣、相心得、諸寺院へも可被達置候、

右之通、寺社奉行へ相達候間、向々へ可被達候、

(寛政九年三月廿九日)

二〇一 佛像撞鐘製作制限ニ付達

一 唐銅ニ而佛像、或ハ撞鐘、鳥居、燈籠之類を造、町中往還へ出し置勸進いたし候儀、先年も相觸候通、堅く停止せしめ候、

一 惣而銅像、石像、木像ともニたけ三尺を限り可申候、其餘撞鐘、鳥居、燈籠之類も、大造之儀ハ一切停止せしめ候、

但、三尺以下佛像たり共、十躰造立いたし候ハ、奉行所へ訴出、差圖を請可申候、
一 佛師、鑄物師、石屋共も、前書之定之通、相心得、大造之品、誂候もの有之ニおゐてハ、奉行所へ訴出、差圖を請可申候、

右之通、可相守候、若相背候ハ、吟味之上、急度可申付もの也、

(寛政十一年六月)

二〇二 僧侶風紀取締ニ付達

諸寺院之輩へ、天明八年御沙汰之趣有之候間、以來諸出家等慎之程、別而貞固ニ可有之儀ニ候處、其後も又不如法之次第共相顯、夫々重き御仕置ニ被處候も、既數度に及ひ、歎敷事共に候、本寺觸頭は勿論之儀、惣て所化僧に至迄、其法之師兄弟又は法類、或は寮主等悉く銘々其因は有之儀に候得は、破戒不如法之事等ハ、其教示不行届所も、又不輕事ニ候間、以來は其筋々を以、本寺觸頭又は法類、師兄弟等教戒之沙汰にも不及、等閑之儀も候ニおゐては、是又其科は可及沙汰儀に候條、其旨相心得、法類一同風俗彌堅固成様、精々厚く申合、可相守候、

右之趣、天明八^申年御沙汰之趣を以、申渡候處、其後不如法成ものも不少候間、此度御老中へ伺之上、猶又申達候間、夫々行届不取締無之様可致候、

(寛政十一年七月)

二〇三 門跡以下諸寺院貸付金取扱ニ付内達

寺社奉行へ

惣而門跡方其外寺院等貸附金之儀、安永四年以來返濟方觸流相止、無據譯相立難被捨置分は、金高不殘公儀へ差出其所之奉行又は御代官より利足并年限を定、貸附候筈ニ相成候處、向後は是迄貸附ニ相成居候分は格別、新規貸附之儀は容易に不承届、併門跡方、比丘尼寺等寺領少分ニ而、實々修復料等差支候歟、何歟格別筋合相立候分は、安永之度達之通、願金高差出、尤最初之金銀高極置、貸増利倍年延願等は難成趣を以承届可申候、

一相對ニ而貸附、貸先名前金銀高届置候分、元高取調此節改而爲相届、以來當時之高より不相増様相達、萬一増候分は返濟滯候共、於奉行所は不取立積、若格別之御由緒ニ而、無據貸附高増別段申立候は、取調之上承届、尤貸附方等等閑ニ不相成様、相應之引當を取候歟、又は町役村役連判證文を以貸渡、一貫目以下小貸之向逆も、同様入念可申、貸附中絶之分は自今不承届筈ニ候、

右之通、今度改而松平和泉守へ相達候間、得其意何も被申立候向も有之候は、右之趣を以取調候様可被致候、

(文政二年)十一月

二一八

二〇四 僧侶風紀取締ニ付達

文政十二年十二月、諸寺院之僧侶取締方之儀ニ付、別紙之通諸觸頭へ申渡候旨、寺社奉行中ヨリ通達有之候間、爲心得申達候旨、公事方奉行衆ヨリ御達有之、諸寺院之僧侶、不律不如法之儀ニ付、天明八年御沙汰之趣も有之、其後寛政十一年も取締方申渡置候者、一寺住職者勿論、所化僧ニ至迄、本寺觸頭或ハ其法之師兄弟始法類寮主等より、常々厚教戒を加へ、不律不如法之沙汰等無之様、堅固ニ可相慎處、近來猶又相弛候哉、女犯破戒ニ及ヒ、罪科ニ被處候者も不絶、夫而已不成、利欲ニ耽、或ハ不相應之金子借入、濟方不實等閑ニ致し候輩も有之哉ニ相聞、且僧侶衣鉢者夫々宗門之規矩も有之儀ニ候處、小寺之住職、或ハ所化僧共之内ニハ、俗人ニ紛敷衣服并被布等を着、剩市中茶店等へ罷越、飲食を恣ニし、就中所化僧共ニ至迄、猶更法外之振舞ニも有之哉ニ而、悉く僧侶之行跡ニ有之間敷事ニ候、右ハ畢竟本寺役寺觸頭其外法類寮主等迄、先年御沙汰之趣相心得、教示之不行届故之事ニ

候、寺院借財之儀ハ俗家と違ヒ、子孫相續ニ無之故、宗門ニ寄、夫々爲取締規矩仕來も有之儀ニ候得共、俗人者不辨筋ニ付、寺附之金子借入候節ハ、宗法之趣を以、得と申聞、濟方不實等閑ニ不相成様可取計儀ニ候、尤金主等より出訴ニ及ヒ候節ハ、吟味之上事實次第令裁許者勿論之儀ニ候得共、畢竟宗體ニ寄、夫々規矩仕來等有之儀も、寺院相續之ため借財濟方等を、不實之取計ニ成行候様ニ而者、自分金銀融通ニも拘、品ニ寄寺院衰微之基ニも可成筋ニ付、右等之次第相心得、女犯破戒ハ勿論、都而不律不如法之儀無之、借財等之儀ニ付而も不實無之様、末々迄教示、一同行届風儀立直、堅固ニ相慎、如法質朴ニ寺務相續候様、厚可申合候、右之通、今般御沙汰之趣を以、猶又老中方へ伺之申渡條、精々無油斷可令教示、尤本寺觸頭等ニおゐて取計難行届儀有之歟、或ハ取計方難決儀も候ハ、一宗一派遂評議ニ相伺候様可致候、

二〇五 府内借地借宅寺社修驗陰陽師調査ニ付町觸

町觸

二一九

御府内借地借宅之寺社、修驗、陰陽師、追而及沙汰候筋も有之候付、住居仕來候年曆當人之名前附、宗旨且奉仕并勸請之神佛莊嚴之様子、無相違取調、去寅年十二月迄(天保元)之分、町々名主共より美濃紙堅帳ニ認、松平伊豆守方へ可差出候、尤追而寺社奉行所より改之役人相廻し候間、取繕之儀申立候ハ、可爲曲事候、

但、追而及沙汰候迄、都而寺院、社人、神職、修驗等ニ至候迄、奉行所之聞濟無之、借地借宅爲致、其外新規は勿論、容易ニ道場取寄之往還へ、商人等差出候様之類、決而不相成候間、其旨急度相守、且類焼等致し候ハ、早々可訴出候、
右之通、町中不洩様可相觸候、

(天保二年)卯正月

二〇六 府内町道場制限ニ付町觸

御府内町道場取寄之往還へ、商人等差出候儀ニ付、先達而伺出候處、右は以後新規之分は勿論、其餘之分込も、近頃出來候分は差留可申、上野淺草廣小路、其外西河岸町地藏、銀町觀音、藥研堀不動等前々より出來候分ハ、先是迄之姿ニ居置可然事、

右之趣、組々へ不洩様早々可申繼候、

(天保二年)卯二月

二〇七 府内類焼町道場普請制限ニ付町觸

御府内住居之寺社、修驗等、市中ニ道場を構、諸參詣等爲致候儀は難成儀ニ有之候處、近來猥ニ相成候間、今般類焼之於町々、市中道場有之候分は、唯今迄之振合を以、普請取掛り候儀は不相成候間、其旨兼而町役人共心得罷在、去卯年町觸之通相心得、早々奉行所へ可訴出候、

(天保五年)午二月

二〇八 府内在住尼僧弟子取禁止ニ付内達

町奉行へ

近來御府内ニ罷在候尼僧共、庵主と唱、弟子取致し候儀不宜事ニ付、向後庵主と唱、弟子取致し候儀ハ不相成段可被申渡候、尤其身困窮ニ迫り、剃髮之上、三衣を着し候道

心者比丘尼ニハ當人ニ限り、是迄之通町方人別ニ加置、右身分ニ而弟子取致し候儀ハ、尼僧道心者之無差別一同差留、當時弟子ト唱差置候分ハ、身寄又ハ店受人ベ夫々爲引渡、右之内身寄無之幼年之分ハ、店受人引受候も迷惑可致筋ニ付、右ニ限獨立經營相成候迄ハ其儘差置、十五歳相成候ハ、店受人方ヘ引取、其段届出、向後取締方嚴重ニ心付候様、町役人共ヘ可申渡候、

(天保十年)

二〇九 諸家勸請神佛取締之觸書

武家屋敷内ヘ勸請致有之神佛ヘ、他所之者爲致參詣候儀、近頃猥ニ相成候様相聞、如何之事ニ候、只今迄參詣爲致來候分ハ、格別新規并中絶共以來堅令停止候、且又只今迄諸參詣爲致來候分共、緣日之砌、同前屋敷構ハ勿論最寄商人之類差出候儀、決而難相成候、若猥之儀於有之ハ、急度可及沙汰候、右之趣不洩様可被相觸候、

(天保十一年十二月廿九日)

二一〇 出家社人山伏等町住居并ニ新規神事佛事等停止ニ付觸書

出家社人等町家住宅之儀ニ付而ハ、寛文元祿之度相觸候趣有之候處、年曆相立候ニ付、不取締之趣相聞候間、此度左之通改革被仰出候、

一 出家社人、山伏、修驗、神職之類ハ町住居令停止候、早々本寺、本社又者同宗同派之寺社内ヘ爲引取可申候、

一 町中ニ而、諸出家共法談說候儀無用可仕事、

一 町中ニ而念佛講ト名附、出家并同行共寄合仕間敷、并町中ニ而太鼓をたゝき念佛題目を唱、大勢人集いたし候儀、彌可爲停止事、

一 陰陽師、普化僧、道心者、尼僧、行人、願人、神事舞太夫之類、本寺或者師家等より弟子無紛段證文を取、其上受人を立、裏店ニ差置可申候、尤裏店ニ候とも、寺講并神前佛檀(攝カ)を構候儀者仕間敷、且道心者、尼僧之類、寺々師家等無之、自儘ニ剃髮いたし候者ハ、以來急度本寺師家ヘ隨身致し、證文等差支無之様可仕候、勿論尼僧者、去ル(天保十)亥年中申渡候通、弟子取一切仕間敷事、

一 諸旦那より祈念頼候ハ、其節計にても繪像無用可仕事、

一右之者、かんはん并ぼんでん自今以後彌出し置申間敷候、宿札計ハ不苦候事、
右之趣、向後急度可相守候、尤是迄本寺本社より證文取置不申、其外彼是不埒之儀も
有之候得共、此度ハ御宥恕を以不及吟味候間、來ル十二月迄ニ急度相改可申候、其後
等閑ニいたし置候もの於有之ハ、家主、名主、地主共嚴科ニ可被處もの也、

右之通可被相觸候、

(天保十三年六月廿五日)

二一 僧侶風紀取締ニ付違

諸寺院之僧侶、破戒不律之儀ニ付、天明寛政、文政之度追々取締方申渡、殊先般流弊
改革之御趣意厚被仰出候後も、今以不如法之僧徒多有之時々相聞候、右は本寺、觸
頭、法類、師兄等厚教諭および、宗祖之戒行、法義之軌範を研窮致し候ハ、風俗も堅
固ニ可相成處、追々申達之次第心得方等閑故ニ候、出家之儀者殊更貪欲之情を絶、
學徳を相磨、寺務專一ニ可相心掛處、利欲之念深放逸無慙之輩不少、歎ケ敷事ニ候、
市中托鉢修行之僧徒、行作不宜、又は略服美服を着し、往來致し候類も今以相見、或

は開帳宗祖之法會、釋門ニ有之間敷造物等いたし候段ハ、佛戒ニ背候のみならず、
おのすから世上之風俗ニ推移、質素節儉之儀御改正之憲法ニ相響、以之外ニ候、向
後本寺、觸頭等修學は勿論、精々宗風興隆之儀厚申合、夫々末派之者如法質朴ニ勤
學修行いたし候様、嚴重ニ教戒を加ヘ、舊弊相去候様可取計、一體不如法相聞る輩
は、吟味之上夫々可處、嚴科當然之儀ニ候得共、此度厚御仁政之御改革ニ付、今一段
教諭いたし、取締方念入申付候ハ、如法質朴ニ逃り候者も可有之、若不取用もの
於有之者、其段本寺、觸頭等より可申出、向後何事ニよらす不如法之儀相聞候ニお
いては、聊無用捨嚴重ニ可及吟味間、其旨兼而心得可罷在候、
右は今般御沙汰之趣を以、猶又伺之上申渡候、此上取締方不行届之僧侶不絶ニお
ゐてハ、本寺、觸頭之可爲越度間、精々無油斷可被取計候、

(天保十三年十二月)

二二 府内開帳入佛取締之町觸

申渡

於御府内開帳入佛之節、附添候儀大幟を持、其上花出し拵付異様ニ致し、或ハ群を立、步行諸事大造成致し方之趣相聞候、依而自らかさつなる事も出来、喧嘩口論等致し、甚以不埒之至ニ候、人々信心之事ニ候ハ、其身計附添可申事ニ候、右躰大造致し候儀、以來群を立、幟并小印迄も決而不相成旨、寛政元西年中申渡置候處、相ゆるみ、町々之もの共、開帳入佛之節大勢迎ニ出、羅紗天鷲絨等之旗、杯持步行、仰山ニいたし候趣相聞候ニ付、尙又去ル天保八西年中も申渡候處、又々相ゆるみ、右申渡之趣致、忘却、旗等持出仰山なる儀も有之由相聞、別而不埒之至ニ候、向後旗杯持出候儀ハ勿論、大勢仰山出候儀、一切相止メ可申候、尤組之者相廻し、萬一前々申渡之趣不相用輩も有之候ハ、召捕吟味之上、當人者勿論、町役人共迄も、急度可申付間、其旨相心得、聊心得違無之様可致候、

右之趣、從町御奉行所被仰渡候間、町中家持ハ不及申、借屋店借裏ニ迄不洩様、壹人別ニ申聞、行届候ハ、來ル十三日迄、町年寄役所へ請書可差出候、

(天保十三年) 寅 十二月

二一三 願人風紀取締ニ付申渡

高林坊
谷之坊

願人共作法近年猥ニ相成、連立市中其外踊步行、三衣も不着頭を包、又ハ裸ニ而家之門口ニ而押施物を乞、往來之妨をなし、其上姪奔戲謔を唱、或ハ判事物之札を配り、兒女之興ニ入候事而已を心掛、錢貰請候段不行跡之至、佛門ニ有之間敷儀、右故情弱放蕩ニ而産業を嫌ひ候者多く弟子ニ相成、乞食非人等ニ等しく以之外之事ニ候、殊ニ半田稻荷勸進、住吉祭之類、近年之仕癖ニ而全く僧侶之體を失ひ、且新き儀以來右類之修業難相成、假令貧窮之者ニ候共、輪袈裟計或ハ裸ニ而勸進致候儀ハ、僧形ニ背候事ニ付、水行其外願人共修業頭を不包三衣を着、佛道を唱、乞食非人ニ不紛様無違失、鑑札致所持、如法質朴ニ修行可仕、且仕來ニ而六十六部、四國順禮、千箇寺參等止宿爲致候趣相聞、右體之儀ハ有之間敷筋ニ而、既ニ奉行所より尋之者、隱居候次第ニも至、不取締ニ付以來他所之者、決而止宿爲致間敷候、

右之通、配下之者共ハ嚴敷可申渡、向後三衣不着不行跡之者有之候ハ、嚴重沙汰ニ

可及之間、無等閑精々取締可致候

(天保十三年) 寅十二月

二一四 寺院取締ニ付内達

寺院取締之儀ニ付御代官惣觸

支配所村々寺院之内、不律不如法之聞有之僧侶、格別之寺格も無之分ハ御朱印地之有無ニ不拘召捕吟味詰御仕置之儀相伺、其餘支配所附屬ニ無之御朱印地并最寄萬石以上以下領分知行村々之寺院も、不如法之趣相聞難捨置分ハ風聞相糺手掛之廉々内探いたし、其節々自分共江可被申聞候、右ハ今般寺社奉行中江懸合之上申達候以上、

(天保十四年) 卯三月

篠田藤四郎殿

外御代官中宛

戸 播磨守○戸川
能登守○安清
跡 能登守○跡部

尙以一紙早々順達留より播磨守方江可被相返候、以上、

右同文言、

卯三月

戸川播磨守

跡部能登守

松平三河守殿

外御預所

役人 中

尙以前同文言、

右同文言 格通、

真田信濃守殿

御預所役人

知久主殿殿

千村平右衛門殿

毛利源内殿

○右ハ勘定奉行ヨリ配下ノ代官及ビ預所役人へ觸達シタルモノ、同文ノ狀
幾通カアルベシ、コ、ニハ、ソノ告知ノ様式ヲ見ルニ足ルヲ以テ、繁ヲ厭ハズ、
二三ヲ列舉セリ、

二一五 諸寺社相對勸化ニ付觸書

諸國寺社修復爲助成相對勸化巡行之節、自今者寺社奉行一判之印狀持參、御料私
領寺社領在町可致通行候、
公儀御免之勸化ニ者無之、相對次第之事ニ候間、御免勸化と不紛様可致旨、御料者
御代官、私領者領主、地頭より兼而可申聞置候、
右之通、明和三^戌年相觸置候處、年曆相立、御免勸化者其度々觸有之、相對勸化は寺
社奉行一判之印狀を持參候故、不審ニ存候向も相聞候得共、紛敷者ニは無之間其
段可相心得候、

右之通、御料者御代官、私領は領主、地頭より不洩様可觸知もの也、

(天保十四年)卯六月

二一六 諸寺院借金取捌方ニ付達

諸寺院借金銀之儀、先住死失、又は御仕置跡引請方等宗掟之趣、兼而之申立も候得
共、今般御改革御趣意有之、以來借金銀取捌方之儀は、宗掟ニ不拘、吟味之上事實次
第奉行所ニおゐて裁許申付候間、其段可相心得候、

(天保十四年七月)

二一七 出家弟子取并ニ離弟ニ付達

出家いたし候もの之儀、今般御觸有之、以來町人者町奉行在方之もの、御料者御代
官、私領者領主、地頭へ所役人より相頼、閑濟之上添簡又は奥書申請候儀ニ付、向後
弟子ニ相成出家いたし度旨申出候ものは、右之趣得と相糺、弟子取可致、且所化弟
子之僧侶爲差犯科無之候とも、元來情弱之生質ニ而、師匠法縁之教示も不取用、宗

門之勤行を怠り教化不行届往々戒行相遂間敷と見居候程之ものは聊愛憐を不加、血脉取上離弟いたし、身寄へ引渡遣し、身寄無之ものは除帳いたし、其もの生國郡村名、親名前、當人之前名等取調書面ニ認、遠國之分者、御當地本寺、觸頭等を以、寺社奉行月番へ相届、相對を以、猥ニ弟子取いたし、又は所化弟子之内不律之僧侶を其儘ニ差置ニおゐては、急度可及沙汰候條、其旨相心得、配下末寺之分へ無洩申達、以後相背申間敷候、

(天保十四年七月)

二一八 後住選定ニ付觸書

諸寺院後住之儀相願候砌、法類ニ無之而は後住ニ不願宗派も有之趣ニ付、今般夫々及取調處品々申立も候得共、學徳を可撰本意薄々相聞候、且亦重立候寺院へ住職いたし候ニハ品々物入も相掛、入院式其外向々へ禮物等多分ニ差出、法類弟子讓も内實金銀を以、後住之契約いたし、兩様共道德法藹相備候而も、金銀之蓄無之ものハ住職難成次第ニも相聞、釋門ニおゐて有之間敷儀、入院式等檀林其外格合

之仕來も可有之候得共、御改革折柄此度右體之舊弊一洗いたし、いつれニも學徳法藹相備候もの、無差支重立候寺院へ昇進相成候様可取計事ニ候、元來一派之僧侶等宗祖之徒弟ニ付、一同法類之處、專受業之師資相承を唱、重立候寺院ニ而も學徳之撰ミ薄く、人情因縁ニ寄、弟子法類ニ而相續いたし候様ニ而は、假令拔群のもの候とも、金銀ニ乏敷、或者法類之内明キ無之は、多年埋もれ居未熟之僧案外昇進致し候様可相成、左候而は自然不律之儀も生し易く、中興開基等之勤勞を以、弟子法類相續致し候向も有之趣ニ候得共、元來僧侶者其身限、寺者一派宗祖之寺跡ニ有之處、未熟之法弟等餘澤を以住職いたし、或者學徳之勵ミ薄、世才ニ長し出世名聞を好ミ、本山へ上ケ金等いたし、又ハ居寺之修復等行届候のみの類を功勞勤績と唱昇進いたし候様ニ而は學徳研窮之者、勵を失ひ可申、尤宗派ニより中等以下並寺ニ至候而は、我物等讓請、寺務不取擾一助ニ而、弟子法弟相續いたし來候分は、無余儀筋も有之候間、其儘居置、以來後住願出寺々は勿論、重立候寺院へ住職之儀、法類ニ不泥學徳相備、法藹世壽相應のものを相撰、宗風興隆致し候様、本山役寺ニおゐて厚可相心掛候、

右之通相達候而も、内實金銀之多少を論し、或は法類を專一ニ而已いたし、廣く搜索をも不遂、未熟之ものを積德之體ニ取替申立候類之心得違候は、糺之上事實次第嚴重ニ答申付、後住は奉行所ニおゐて人撰之上、申付候儀も可有之候間、聊も無等閑御改正之御趣意行届候様可致候、

(天保十四年八月)

二一九 虚無僧取締ニ付觸書

虚無僧とも修行之體ニ而、ねたりケ間敷申懸候もの之儀ニ付、安永三午年相觸候趣も有之處、近年宗風猥ニ相成、不法狼籍之者多く候ニ付、今般取調之上、當役寺於番所形を忍ひ候子細承候者之外、一宗寺院ニ而ハ入宗致候僧侶一人別ニ不相成者、弟子ニ致間敷、尤弟子取致候節、武家勤仕候者を入宗證人相立可申、元來普化禪宗之唱、臨濟之支流候、專ニ禪宗を相守、武門之隱家或ハ身元難題、杯申唱候筋ニ無之、向後眞實之虚無僧而已を致し、宗縁助僧等之名目一切相止、修行先之儀ハ都而諸宗僧侶同様志次第之施物を請、相對を以穩便ニ止宿等致し、御用向杯申唱、或ハねたりケ間敷儀

等致間敷旨、一宗之者共へ申渡候間、若此上不法之者於有之ハ其所ニ留置、早々可訴出候、

(弘化四年十二月廿六日)

二二〇 佛像佛器鑄造禁止ニ付觸書

銅鐵を以新規ニ佛像等鑄造いたし候儀、并佛器之儀も木製又ハ陶器ニ而も相濟候分、銅鐵類を以製造之儀可爲無用旨等、去ル卯年相觸候趣も有之處、以後都而銅類ハ勿論、唐銅眞鍮を以是迄製造いたし來候品之外、新規之品等製造賣買之儀ハ堅ク令停止もの也、

右之趣、御料私領寺社領等へも不洩様可被相觸候、

(安政六年九月四日)

二二一 曹洞宗衣鉢定

越前國永平寺關三箇寺與能登國摠持寺衣鉢之儀異論ニ付相定覺

一曹洞一宗之衣鉢古今區々而一定不致異論有之ニ付以來一宗之僧侶環附之袈裟ハ相止環無之袈裟可相改事、

一摠持寺を始加賀能登越中三箇國ニ罷在同宗之寺院ハ從來之趣を以いつれの袈裟着用候共可爲志趣次第事、

一摠持寺へ輪番相勤ル寺院右輪番中ハ同寺志趣次第之三衣可相用作併摠持寺并加能越三箇國之寺院たりとも永平寺へ登山之節ハ環附之袈裟着用いたす間舖事、

一一宗之轉衣僧 綸旨頂戴ニ令上京之節ハ向後環無之七條衣以上可相用之雖然加賀能登越中三箇國之寺院ニおゐてハ志趣次第之衣鉢可相用事、

一轉衣之望ある者は彌以志趣次第兩山之内可致登山之尤環無之袈裟着用之僧侶有之候而も摠持寺ニおゐて不可有異儀事、

右之條々今般衆議之上達老中之聽相定之畢向後永平寺摠持寺ヲ始一宗之僧侶相互ニ和融いたし彌宗門興隆尤可心掛候依而爲後證右令印判下置條永不可有異論者也、

安政七庚申年二月

水野左近將監(印)○精○忠
 松平伊豆守(印)○古○信
 松平伯耆守(印)○秀○宗
 松平右京亮(印)○輝○

永平寺へモ宛テ、法令、コノ外摠持寺

寺社奉行より御附(添カ)へ紙面之寫

曹洞宗越前國永平寺并ニ關三箇國能登國摠持寺衣鉢之儀異論有之候附今般内藤紀伊守殿依御差圖拙者共連印之定書相渡候右ニ付而者以來同宗之轉衣僧綸旨頂戴として上京之節環無之七條以上之袈裟可相用尤加賀能登越中三箇國ニ罷在候同宗之於寺院ニ者志趣次第之衣鉢可相用旨相定候間右之趣執奏勸修寺家へ被相達候様存候事、

(安政七年)申二月九日

江戸時代宗教法令集終

頁	補	正	補	正
一三	四	總靈寺ノ下ニ「同文ノ法度、コノ外龍穩寺ヘモ宛テ、發セラレタリ」ノ注ヲ補フ、		
一四	二	臺ヲ台ニ改ム、		
八四	七ノ次	(萬治二年十一月)ヲ補フ、		
九二	六	十一月ノ下ニ(四日)ヲ補フ、		
一〇八	六ノ次	(寛文九年四月三日)ヲ補フ、		
一一七	九ノ注	隱ヲ穩ニ改ム、		
一一九	一三ノ次	(貞享元年六月)ヲ補フ、		
一九二	二ノ次	(明和四年十一月)ヲ補フ、		
一九九	九	二月ノ下ニ(廿九日)ヲ補フ、		

大正十四年三月二十八日印刷
大正十四年三月三十一日發行

文部省宗教局

東京市淺草區南松山町四十六番地

印刷人 木島三代太郎

電話淺草四、二八五番

東京市淺草區南松山町四十六番地

印刷所 木島印刷所

終